新進芸術家海外研修制度
研修結果報告書

研修開始年度｜令和 3（2021）年度

分　　野｜美術（文化財保存修復）

研　修　先｜ギリシャ（アテネ）

研 修 期 間｜1 年研修

氏　　名｜髙橋　香里

１．研修目的（課題）

日本の現代壁画の保存修復に活かすため、ギリシャのグラフィティ・アートの保存活動を学ぶ

２．研修日程

研修先　：西アッティカ大学（University of West Attica）

所在地　：ギリシャ（アテネ）

指導者　：マリア・ハジダキス（教授）

研修期間：令和 3(2021)年 11 月 1 日～令和 4(2022)年 10 月 10 日

３．研修内容、成果

Ａ）研修課題の題目

【課題】ギリシャにおける現代壁画（グラフィティ・アート）の保存活動を学ぶ

グラフィティとは、壁面に図像を描く行為を指すが、その価値の捉え方は、「落書き」から「アート」まで、個人、文化、社会等によって大きく異なる。アテネでは、20 世紀後半以降、街中の建物の外壁にインクや塗料で、行政や所有者の許可なく絵を描くことが流行し、最初は「落書き」とみなされていたが、近年ではその芸術性が評価されるようになった。芸術性が高いと認識された絵画は、グラフィティ・アートと呼ばれ、積極的に保存・修復が行われている。グラフィティ・アートは、古代・中世の伝統的な壁画とともに、アテネの街を象徴する現代壁画として活用されている。一方、ギリシャとは文化・風土の異なる日本では、非合法に建物に書かれた絵をアートと認識することは一般的ではないが、20 世紀以降、多くの屋外壁画が制作されており、今後は、保存・修復処置が求められることがさらに多くなると想定できる。しかしながら、日本には、壁画の技法・材料及び保存修復を専門的に学ぶことができる教育施設はなく、とりわけ、新しい絵画材料や現代の環境変化に対応する最新の保存修復技術の情報収集や技術の習得は困難である。日本で現代壁画を扱うことができる保存修復家を目指すため、ギリシャで現代壁画の一種であるグラフィティ・アートの保存修復を学ぶ。

【研修内容・方法①】グラフィティ・アートの保存修復を学ぶ

グラフィティ・アートの保存修復の授業および修復プロジェクトに参加する。研修先である西アッティカ大学歴史遺産保存学部壁画研究室は、壁画の技法・材料研究及び修復技法の研究において、国内唯一無二の研究機関であり、本研修の指導者であるマリア・ハジダキス教授は、アテネ市内の建造物に描かれたグラフィティ・アートの保存・修復を牽引する研究者として世界的にも有名である。グラフィティ・アートは、伝統的な絵画材料に含まれない塗料で描かれることが多く、また、風雨や大気汚染に晒される環境を余儀無くされることも珍しくはないが、これは、日本の現代壁画にも共通する保存上の問題で

ある。このような現代壁画特有の問題に対処するための保存・修復技術を学ぶために、同大学では、グラフィティ・アートの修復作業をカリキュラムに取り入れており、学生が実践を通して技術を身につけている。また、現代壁画に適した修復材料の選定や劣化のシミュレーションなどの実験も行われており、最新の保存修復技術を学ぶことができる。研修先のカリキュラムや実験、プロジェクトに参加することで、現代壁画に適した技術や知識を習得し、日本の現代壁画にも汎用できる保存方法を学ぶ。

【研修内容・方法②】ギリシャにおける壁画の保存修復事例を調査する

西アッティカ大学 歴史遺産保存学部壁画研究室が携わっている修復事業の見学、および、同研究室に保管されている壁画の保存・修復活動に関する研究資料から、ギリシャにおける壁画の保存・修復事例を調査する。ギリシャは、古代から中世、現代に至るまで、バラエティー豊かな壁画作品が現存する類い稀な国家であり、時代、主題、材料の異なる壁画の保存・活用事例に触れることができる。研修者は、エジプト古王国時代の壁画の調査、アフガニスタン共和国の仏教壁画の調査・修復を行った実績を持っており、材料や保存環境、さらに、作品の活用の目的などによって、求められる保存処置が異なることを、身をもって学んできた。伝統的な文化に誇りを持ちながら、新しい芸術を許容するギリシャの修復家の活動にふれ、日本とは価値観が全く異なる保存・修復事例を学ぶことで、保存修復家として見識を豊かにする。

Ｂ）研修の成果

<u>大幅に達成できた</u>

研修課題の達成度合については、大幅に達成できたと考える。

課題として設定した細目ごとの研修成果の詳細は下記の通りである。

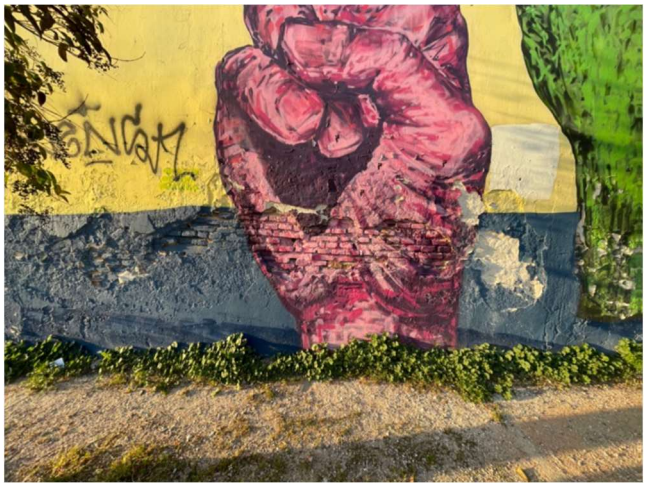
【研修内容・方法①】グラフィティ・アートの保存修復を学ぶ

ギリシャの現代壁画の現状を把握するために、アテネ市内の屋外壁画（パブリック壁画、グラフィティ・アートの両方を含む）の調査を行なった。東京都と比較して、公的に、もしくは建造物の所有者に認められたパブリック壁画、非公式かつ違法に制作されたグラフィティ・アート、どちらも数が圧倒的に多く、壁画が身近な国であることを認識できた。グラフィティ・アートは、「グラフィティ・アートツアー」が頻繁に開催されるほど人気があり、観光資源としての一面も持っていることがわかった。歴史的建造物に描かれたグラフィティ・アートに関しては、保存するべきなのか除去するべきなのか見解が分かれており、保存修復専門家の間でも活発に議論が行われている。

有名なアーティストによるパブリック壁画　観光名所にもなっている。

旧市街の歴史的建物に描かれたグラフィティ・アート　非合法に描かれた壁画に関しては、建物の所有者の意向によって除去されることもある。

古代遺跡の間を走る電車にもグラフィティが描かれている。歴史遺産へのグラフィティには観光資源として観点から批判的な声が多い。



グラフィティ・アート（左）と拡大した部分写真（右）
屋外壁画は劣化が顕著であり、短いスパンでの修復が必要となる。また人的な損傷（落書きなど）もある。

本研修の所属先である西アッティカ大学歴史遺産保存学部が開講するストリート・アートの保存修復の講義を受講し、保存修復倫理的および技法・材料的な観点から、グラフィティ・アート特有の問題について考察を深めることができた。まず、保存倫理的な観点から、ギリシャと日本におけるグラフィティ・アートの受容について検討した。日本と比較してグラフィティ・アートが広く受容されているギリシャでは、グラフィティ・アートの制作が盛んになった１９７０年代以降の政治・経済情勢、文化が交錯してきた地理的・歴史的条件など、日本と異なる社会的背景があることが理解でき、社会的側面からのグラフィティ・アートの本質を理解する必要性を感じた。今後、保存専門家としてグラフィティ・アートを保存するか否かという問題に直面した際に、日本の歴史や伝統的な文化、国民性などを広く視野に入れる姿勢が必要であることを認識した。技法・材料的な観点では、グラフィティ・アートの劣化症状とその原因について知見を広げた。グラフィティ・アートを含む屋外壁画が晒される過酷な環境は、日本の屋外壁画にも共通する保存上の問題を多く含んでいるため、将来的に日本の現代壁画の保存修復に役立てることができると考える。また、プラスチックやアクリルといった 20 世紀後半以降の材料に関する知識を深めることができたため、現代美術の保存修復に応用できる知識を得ることができたと考える。

グラフィティ・アートの保存修復の講義の様子
グラフィティ・アートに一般的に用いられる絵具を塗布し、劣化症状を観察した。

アテネ市内のグラフィティ・アートの表面の拡大写真
何層もの絵具が塗り重ねられたグラフィティ・アートは、塗り重ねられた時期、
アーティストによって使用した材料が異なるため、保存修復処置が難しい。

所属する西アッティカ大学歴史遺産保存学部壁画研究室が主催する壁画制作プロジェクトに参加した。本プロジェクトは、現代壁画の材料と制作技法を、実践を通じて学ぶとともに、その劣化要因と劣化症状について考察していくことを目的とし、教員と有志の学生が共同で取り組む課外授業である。多くの学生が積極的に参加し、グラフィティ・アートへの関心の高さを実感した。また、壁画を制作するだけではなく、過去に学生によって制作された壁画の修復処置を行なうことで、修復方法を実践的に学ぶことができた。

研究室の中庭で壁画制作のための材料を用意する様子

過去に製作したグラフィティ・アートをコンクリートの壁から剥がす実習の様子
建物の取り壊しによりグラフィティ・アートを移設する状況を想定して実習を行なう。

壁画の修復材料を比較検討する実習の様子
サンプルを用いて、壁画表面の保護、その除去の実験を行なった。

【研修内容・方法②】ギリシャにおける壁画の保存修復事例を調査する

ギリシャと日本は、壁画における材料・技法、壁画が晒される気候など、あらゆる面で大きく環境が異なる。現代壁画は、西洋の壁画の伝統に基づくものであるため、将来的に日本の現代壁画を扱うためには、西洋の壁画制作の歴史、保存修復の歴史を学ぶ必要があると考えた。そのため、壁画の保存修復に関連する講義に参加し、ギリシャの伝統的な壁画の材料・技法を把握し、劣化実験によって保存上の問題を検討した。また、伝統的な技法と材料を用いて、中世の壁画の再現を行なった。

中世の壁画の技法・材料に基づいて、サンプルを作成する様子　劣化実験により、壁画の劣化のメカニズムを学ぶ。

伝統的な技法と材料を用いて中世の壁画の再現を行なう様子

歴史遺産保存学部壁画研究室が携わっている修復事業の見学、および、同研究室に保管されている壁画の保存・修復活動に関する研究資料から、ギリシャにおける壁画の保存・修復事例を調査した。ギリシャ各地に遺る古代・中世の壁画を熟覧し、ギリシャの壁画文化に関する見識を広めた。古代の壁画としては、ペロポネソス半島のミケーネ遺跡やサントリーニ島のアクロティリ遺跡等、中世の壁画としては、ゲルメノ港沿岸に位置するアゲオスゲオルギオス教会等を訪れた。古代の遺跡は観光資源として関心が高いため、調査・修復・保存が十分に行われてきたと考えられるが、中世の壁画は、調査・修復・保存が現在も継続される必要があるという印象を受けた。

サントリーニ島・アクロティリ遺跡

アゲオスゲオルギオス教会での壁画調査の様子

西アッティカ大学歴史遺産保存学部にて“Conservation of Traditional Japanese Wall Paintings”（「日本の伝統的壁画の保存について」）と題する講義を担当した。主に保存修復を学ぶ学生、教員を対象とした講義であったが、オンラインの受講も受け付けたため、保存修復家や他大学の学生など、50 名程度の受講者に向けて講義を行なった。講義では、日本の壁画の歴史を導入に、伝統的な壁画の材料と技法、保存修復事例の紹介を行なった。講義の後半には質疑応答の時間を設け、日本の壁画について、日本とギリシャの保存修復の在り方の違いについて、活発な意見交換を行なうことができた。特に、障壁画のレプリカの制作と展示に関する関心が高く、自国の文化の独自性を改めて認識するきっかけとなった。外国人に自国の文化を紹介する講義を行なったことは、今後、国際的な場で活動する際にも役に立つ経験であると考える。

Ｃ）研修成果の活用計画

研修後は、東京藝術大学にて文化財の保存修復に関わる研究を続ける所存である。東京藝術大学には壁画の保存修復を専門とする研究室が存在しないため、在外研修で得た知識と技術を同大学文化財保存学にて広げていきたいと考える。壁画に関連する国内の保存修復プロジェクトへも積極的に参加する所存である。

また、西アッティカ大学での研究員の任期は 2024 年まで継続するため、同大学の教授・研究員との共同研究も継続する。壁画の状態調査を行うため、2 年以内に現地への渡航も検討している。また、研修中の成果に関する論文の執筆、国際学会での発表、同大学での講義を予定している。今後は、東京藝術大学と西アッティカ大学、両大学における研究員であるという立場を活かして、両大学の文化財保存学同士のさらなる交流を促進していきたい。また、在外研修中の受入れ機関である西アッティカ大学およびギリシャ共和国考古文化遺産省との関わりを継続させ、日本・ギリシャ両国の文化の繋がりに貢献していきたいと考える。

Ｄ）研修国の情報

ギリシャでは、国が管理する文化財を扱う保存修復家は、歴史遺産保存学部の学士の学位を取得する必要がある。私が所属する西アッティカ大学は、ギリシャで唯一の文化遺産保存学部を持つ大学であるため、実質的に、当大学当学部の卒業生のみが保存修復家として活躍することを許可されている。修復家の地位が国によって守られているため、日本と比較すると保存修復家としての職を得る機会が多い。また、EU の一員であることから、ヨーロッパ各国からの文化財保護の資金的・技術的支援のオファーが多く、さらに、エラスムスプログラム等の人材交流やシンポジウムや学会なども盛んであるため、文化財保存に関する最新の情報に常にアクセスできるという点は大きな利点である。

ギリシャでは、現代芸術などの日本文化や日本発のテクノロジーへの関心は大きいものの、日本の伝統文化や歴史への理解は深くないという印象を受けた。ヨーロッパの他の国々と比較してギリシャ在

住の邦人の数が少なく（同様に日本在住のギリシャ人も少なく）、また、日本とギリシャ間の観光業がそれほど盛んではないことが原因であると考えられる。しかし、ギリシャは古代からの独自の文化や風土を大切にする国柄であることから、独特の伝統的な文化を持つ日本への関心は今後高まるものと考える。